

飲み屋の棚に、
自分の友のメッセージとかノート
があるというのは、何か見て誰で
も楽しいのかね。そういう共感が
こんな数になったんだと――



インタビュー ④ 有薫酒蔵四方山話

隈 正之輔

くま・しょうのすけ 昭和10年生
久留米大学附設高等学校1回生 1953年卒業
高校よせがきノート生みの親

イ「隈さんと新橋有薫酒蔵との出会いはい？」

隈「有薫は最初は銀座の銀一小路（銀座二丁目、第一ストアービル）というところに小さい店があったんです。そのうちに銀座店が出来て、ずっと通ってました。そして協和君が今のママ（松永洋子）と結婚しちゃってね。新橋に（協和君の）新しい店が開店しちゃったんだよ。そしたらね、カツヨさんって言う1号ママさんが、『隈さんあんたはね、今後は息子の協和んとところに行ってください。』って。それで開店以来、ずっと新橋の有薫に通ってます。入口入ってすぐの1番カウンターのずっと居座ってます。」

イ「高校よせがきノートが出来るまではお店に通い始めてから何年くらい経ってから？」

隈「開店して10年目くらい。1987年だからもう30年になるんだね。ちょっと考えられないんだけど。」

イ「ノートを作ろうと思ったきっかけは？」

隈「僕が東京の同窓会の副会長をしたので、普段は有薫で呑んだるから、上京してきたやつとかがしょっちゅう会いに来てたりしてたんですよ。いない時もあるから、ノートを置いていたら伝言とか、何か近頃珍しい話題があったとか書いてくれたりしたら面白いんじゃないかなと、そういうことでママに『ノート置いてよかね？』って置いたのが最初です。」

よ。」

限「携帯とかそんなものはないから。昔は言ってみれば紙にメモ書いて残しとくくらいしかできないでしょ。そういう時代ですよ、30年前っていうのは。」

◇

イ「そのノートが今30年経って、3000校を超えたというんですが…」

限「ママがね、ママがやっぱり大変な努力をしてね育て上げたのかな、そういうことじゃないかね。30年で3000冊って言ったら、3日に1冊ずつ作らないかんのやからね。そりゃ大変よ。」

◇

イ「作った当初はこんなに長く続くとか、3000校にまでなるとか考えていましたか？」

限「そんなことわしゃ考えないよ。わしも考えないし、ママも考えてなかったはず。ただ棚の端に置かせてくれて言っただけ。そしたらママがね、そのノートに久留米大学附設高校って書いたんだな。それが棚に1冊あるわけよ。そしたら有薫には九州出身のお客さんがたくさんくるわけだ。『それはなんか？このノートは？』って、『何で附設のだけがあるのか、俺たちにも置かせろ。』って。」

限「戦後できたばかりの附設が、なんでこげん1番でええばって置いてんのか、俺たちも置かせろ」って。始めは福岡県の主だった一流校が怒って置かせろっていつて増えたのが10冊か20冊になったんだな。ただ、それからそんなに増えなかったのよ。だ

から500冊、1000冊になるのは随分かったんじゃないかな、10年以上。」

◇

イ「当時のノートを持ってきたのですが。」

限「こんなにね、修理してね。これはいいノートだったからこうしてもってんだらうね今まで。30年だからね。」

イ「当方で1200円したそうです。」

限「これ確か伊東屋に買いにいったんじゃないかな。」

限「俺がノート置いていいなって言ったらね、ママが『うん、いいいいいよ』って買いに行ってくれたんだよね、わざわざ。」

イ「最初からそんなに高価なノートを買いに行ったというのは…」

限「やっぱね、んーわしらの思い入れがあると思っただんかしれんな。」

イ「もう大分ボロボロになっていますが、まだこれおかみはずっと修繕しながら。」

限「そうそうそう。」

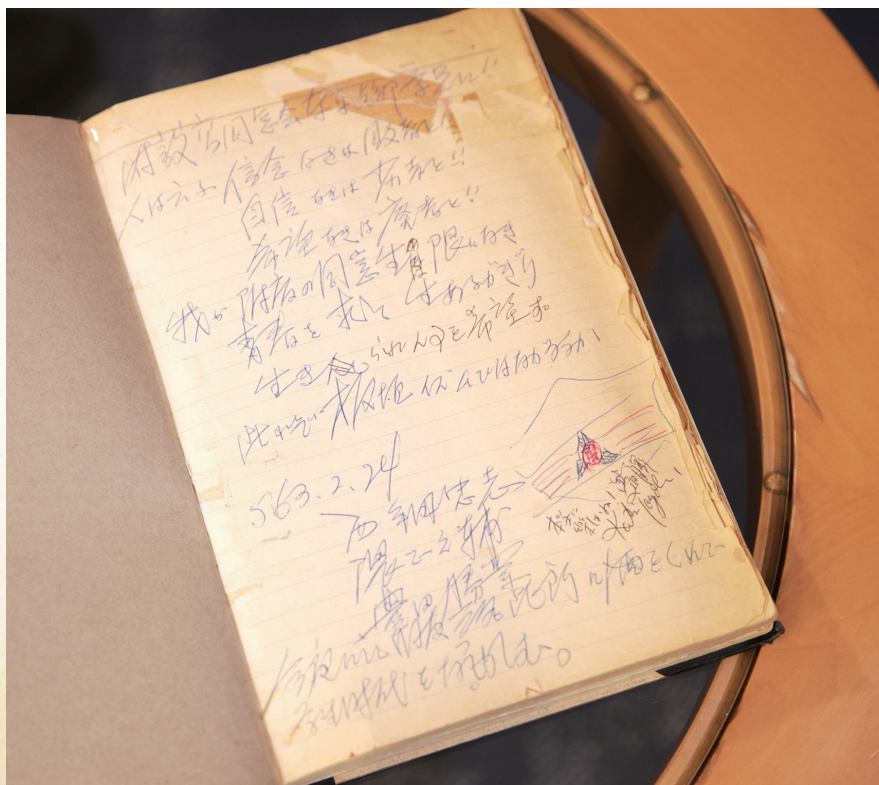
◇

限「初めの方は上京してきたやつが有薫で飲んで記念みたいに書いていくのはね結構多かった。それから同窓会の帰りに書くこともあったんじゃないかな。これは鳥越俊太郎が毎日新聞の記者の頃に書いたんじゃないかな。これ6回生の幹事会のやつだね。」

イ「当時のよせがきを見て何か思い出すことありますか？」

◇

限「この西牟田が同窓会長でね、僕が副会長。この豊田勝業というのは、有名は豊田勝秋さんという佐賀大学で教授をしてた美術の先生の息子なの。東京



高校よせがきノートの第1冊目。限さんらのよせがき

で会社の社長をして、自分の小さな会社のビルを持っていたので、そこに支部の事務所を置いてね、お前支部長をやれって。豊田君が第1回の東京支部長なんですよ。」

限「3人とも附設高校1回生で、豊田が1番早くに亡くなり、西牟田はもう5年くらいになりやせんかな。」

イ「最初のページに大石亀次郎先生（附設高校教諭、漢文）の揮毫があるんですが、これは限さんがお願いして書いていただいたと伺いましたが。」

限「そうです。ここのね福岡支部長・牛嶋定信と書いてあるけど、この人は慈恵医大の精神科の教授になった人だけど、この人が1番最初（87年）に書いてるわけ。そして亀さん（大石亀次郎）に頭書きを書かせようというので（久留米まで）送ってね、送り返してきたものに巻頭言みたいなのを西牟田に書かせて、3人で署名したっていうのが最初ですよ。ノートが返って来るのにね半年かかったら。だから我々が最初に書いたのは88年なんです。」

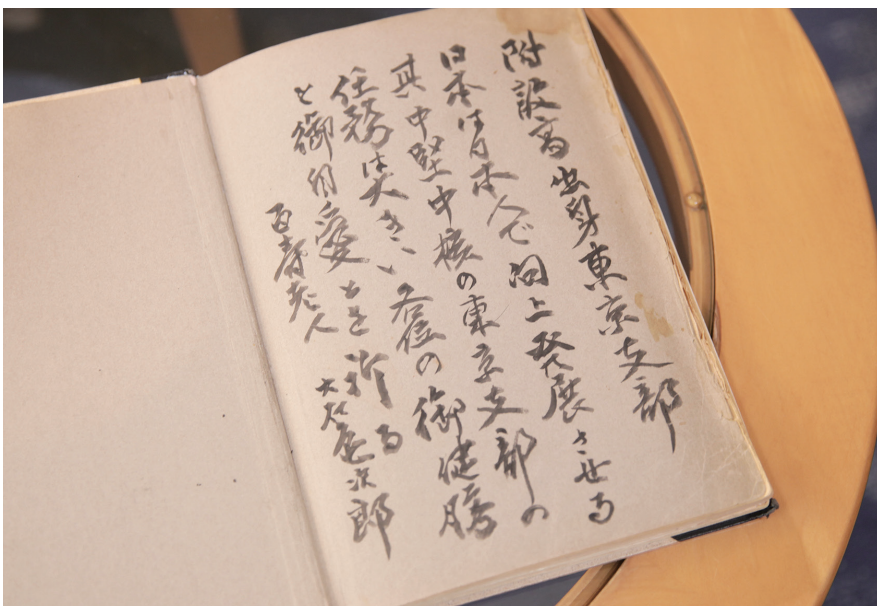
限「当時亀さんは100歳だったから、中々返って来ない。」

イ「100歳でもきれいな字を。」

限「字書くのはね趣味みたいな人やったからね。」

イ「高校よせがきノートは今後どうなっていくと思

大石亀次郎先生の揮毫



いますか。」

限「んーいやー、大体こんなどれくらい形にね成そうと思って僕は作ったわけでもないしね。しかし何かな、そのー、言ってみりゃ飲み屋の棚にね、何か自分の友のメッセージとかノートがあるというのは、何か見て誰でも楽しいのかね。きっと僕はそういう

共感がこんな数になったんだと。」

限「あとは公共のどこか博物館かなんかに置いてもらうとかね。ママは元々ピエロの蒐集家なのよ。自分の家の1室をピエロで占拠されてしまってるように、大体物を集める趣味があるからね。彼女はピエロの博物館を作るって前から言ってたからピエロと併せて、高校ノート博物館っていうのを作ったらいいんじゃないかな。」

